^{たかんな} ヌニ+* た **笋 百本、□□□□追ひ給び**了んぬ。

妙法蓮華経第七に云はく「若し復人有って七宝を以て、三千大千世界に満てゝ、仏及 び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん。是の人所得の功徳も此の法華経の乃至一四句 偈を受持する其の福の最も多きには如かじ」云云。文句の第十に「七宝を四聖に奉るは 一偈を持つに如かずといふは、法は是聖の師なり、能生・能養・能成・能栄法に過ぎた るは莫し。故に人は軽く法は重し」云云。記の十に云はく「父母の必ず四の護を以て子 を護るが如し。今発心は法に由るを生と為し、始終随家するを養と為し、極果を満ぜし むるを成と為し、能く法界に応ずるを栄と為す。四つ同じからずと雖も法を以て本と為 す」云云。経並びに天台妙楽の心は、一切衆生を供養せんと、阿羅漢を供養せんと、乃 至一切の仏を尽くして七宝の財を三千大千世界にもりみてゝ供養せんよりは、法華経を 一偈、或は受持し、或は護持せんはすぐれたりと云云。経に云はく「此の法華経の乃至 一四句偈を受持する其の福の最も多きには如かじ」と。天台云はく「人は軽く法は重し」 と。妙楽云はく「四同じからずと雖も法を以て本と為す」云云。九界の一切衆も仏に相 対して此をはかるに、一切衆生のふくは一毛のかろく、仏の御ふくは大山のをもきがご とし。一切の仏の御ふくは梵天三銖の衣のかろきがごとし。法華経一字の御ふくの重き 事は大地のをもきがごとし。人軽しと申すは仏を人と申す。法重しと申すは法華経なり。 夫法華已前の諸経並びに諸論は仏の功徳をほめて候、仏のごとし。此の法華経は経の功 徳をほめたり、仏の父母のごとし。

華厳経・大日経等の法華経に劣る事は一毛と大山と三銖と大地とのごとし。乃至法華経の最下の行者と華厳・真言一切の最上の僧とくらぶれば、帝釈と獼猴と師子と兎との勝劣なり。而るをたみが王とのゝしればかならず命となる。諸経の行者が法華経の行者に勝れたりと申せば、必ず国もほろび、地獄へ入り候なり。但しかたきのなき時はいつわりをろかにて候。譬へば将門・貞任も、貞盛・頼義がなかりし時は国をしり、妻子安穏なり云云。敵なき時はつゆも空へのぼり、雨も地に下り、逆風の時は雨も空へあがり、

『日出の時はつゆも地にをちぬ。されば華厳等の六宗は伝教なかりし時はつゆのごとし。

真言も又かくのごとし。強敵出現して法華経をもってつよくせむるならば、叡山の座主 ・東寺の小室等も日輪に露のあへるがごとしとをぼしめすべし。

法華経は仏滅後二千二百余年に、いまだ経のごとく説ききわめてひろむる人なし。天台・伝教もしろしめさゞるにはあらず。時も来たらず、機もなかりしかば、かききわめずしてをわらせ給へり。日蓮が弟子とならむ人々はやすくしりぬべし。一閻浮提の内に法華経の寿量品の釈迦仏の形像をかきつくれる堂塔いまだ候はず。いかでかあらわれさせ給はざるべき。しげければとゞめ候。

たけのこは百二十本、法華経は二千余年にあらわれ候ひぬ。布施はかろけれども志重き故なり。当時はくわんのうと申し、大宮づくりと申し、かたがた民のいとまなし。御心ざしふかければ法もあらわれ候にや。恐々謹言。

五月十一日

軍 花 押

西山殿御返事